Ⅱ 歴史的分野の目標と内容

○はじめに

「歴史とは何か」の問いに，イギリスの歴史学者E．H．Ｃａｒｒ（カー）は「現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話である」(岩波新書『歴史と何か』清水幾太郎訳）と答えている。

その，対話を可能にするのが，歴史的事実である。

それでは，過去の無限の人々の営みの事実の中から，対話を可能にする歴史的事実としてそれを取り出すとすれば，何らかの規準が必要になってくる(ここでは歴史的事実と訳されているが，学習指導要領では歴史的事象として表記している)。

それを，歴史家は史観と称し，歴史家によりその史観は異なる。だからこそ歴史は解釈が無限でありロマンの宝庫ともいえるのである。

昨今「歴女」（レキジョ）なる言葉もある如くの歴史ブームであり，テレビドラマの歴史物語や歴史探訪等の番組はどれも視聴率が好調と聞く。

一方，教育現場の歴史学習はというと，「歴史的事象の羅列的学習になりやすい」「覚える歴史的事象の数の多さから知識の暗記学習になってしまう」というボヤキが聞こえてくる。

中でも近現代史にその傾向が強い。

このような学習からは，生徒に「歴史的事象に対する関心をもたせ，歴史を学ぶ意欲を高める」ことや「我が国の伝統と文化の特色を広い視野に立って考える」こと，さらには「我が国の歴史に愛情を深める」「国民としての自覚を育てる」（以上，学習指導要領からの抜粋）ことは厳しいであろう。

ましてや，自分たちと同じＤＮＡをもった日本人の遠い祖先の日々の生活の営みの積み重ねが，現在の我が国の姿であるという意識をもたせることは期待しにくいであろう。

今回改訂された学習指導要領は，このような現実を踏まえ従来にも増して，通史学習でも，暗記学習でもない魅力ある歴史学習の在り方を示している。

言い換えれば，国際化社会を迎え，異なる価値観，宗教観，文化などが混在する変化の激しい21世紀に生きる生徒に，「生きて働く歴史の学び方」「君は，連綿と続く我が国の歴史の主人公の一人ですよ」「我が国の新しい歴史をつくるのはあなたです」という意識を育てる歴史学習の方向性を示しているのである。

そのような視点に立ち，今回改正されたポイント，学習指導要領が求める指導方法，社会科の究極の共通目標である「公民的資質の基礎の育成」などを踏まえ，歴史的分野の目標と内容について概説する。

1．歴史的分野の基本目標

①歴史的分野の学習の全体構成

学習指導要領に示された，歴史的分野の目標は，４項目から成り立っている。

具体的には，目標(1)は歴史的分野の基本的目標を示している。

目標の(2)と(3)はそれぞれ，歴史上の人物と文化遺産についての理解の視点と，国際関係や文化交流の理解の視点について示している。

目標の(4)は，以上の学習を通して，身に付けさせたい歴史の学び方の能力と態度について示している。これらの相互関係を模式図化したものを示す(図①)。

《図①》

②歴史的分野の目標

目標(1)

目標(1)に示された，歴史的分野の基本目標は以下のように整理できる。以下概説する。

①歴史的事象に対する関心を高めること。
②我が国の歴史の大きな流れを世界の歴史の流れを背景に各時代の特色を踏まえて理解すること。
⇓　以上の学習を通して　⇓
③我が国の伝統と文化の特色を広い視野に立って考えさせる。
⇓　その結果　⇓
④我が国の歴史に対する愛情を深め，国民としての自覚を育てる。（到達目標）

目標(1)①では生徒に歴史的事象と自分との距離感の短縮を図ることを求めている。前述した如く，歴史的事象と今の自分の生活は連綿と続く時間軸の中でつながっていることへの気付きの学習の必要性を示している。この目標の学習内容が，指導要領の２の内容の(1)歴史のとらえ方，に示された内容である。具体的には，身近な歴史遺跡の調査見学，博物館，資料館などの見学学習などの学習である。さらに，歴史に関心をもつために最低限必要な，知識・技能の習得である。例えば，年代の表し方，様々な時代区分の方法，年号等自分で歴史を調べるための基礎的な知識・技能の習得の学習が含まれている。

②については「我が国の歴史の大きな流れ」の理解が中心であるが，ただ時系列的に大きな流れを理解するのではなく，「各時代の特色」をしっかり踏まえることを明確にすることで，通史に流れないようにすることの重要性を示している。

さらに，国際化時代の到来を踏まえて，世界の歴史を背景に我が国の歴史の大きな流れを理解させることを示している（各時代の特色については後述)。

③は，我が国の伝統と文化の特色を諸外国の歴史や文化との相互関係の視点など幅広い角度から理解させることを示している。

さらに，それらを継承発展させる意欲と態度の育成を目指すことの必要性も示している。

具体的には，我が国の伝統と文化を単なる知識に終わらせるのではなく，生徒の日々の暮らしに変化と彩りを添えている生活実感として意識化させることを意味している。例えば，子どもの頃の七五三やお宮参り，桃の節句や端午の節句，等の通過儀礼的な習俗習慣。さらには，お彼岸やお盆，初詣というような我が国固有の習慣等を，我が国の歴史と結び付けて理解させ，それらを継承していく担い手としての意識を育てることを目指している。

④は，国民として自国の歴史と文化に誇りをもたせることをねらっている。国際化社会において自国の歴史に愛情をもてない国民は他国の文化や歴史を尊重する意識ももてないという極めて自明の理を示した目標である。それ故，歴史的分野の目標は，社会科の目標である「公民的資質の基礎」の骨格となる資質や意欲，態度の育成にもつながるものである。

目標(2)

目標(2)は以下のように整理できる。

○国家・社会
○文化の発展
○人々の生活の向上
に尽くした
⇓
歴史上の人物(人物群)
と
○その時代や地域との関連で
⇓
現在に伝わる文化遺産
を
理解し尊重する態度の育成
（到達目標）

目標の(2)は，国家・社会及び文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物の理解と，現在に伝わっている文化遺産の大切さと理解の視点を示している。

歴史が過去の多くの人々の生活の営みや息吹，当時の人々の思いや願いの集積であり，それらが生徒に見える形で残されているものが人物の足跡であり文化遺産である。

従って，人物の足跡の中に，人々の息吹や生活を感じ取れるような教材構成が求められるからである。

詳しくは後述するが，先人の働きは当時の人々の願いや考え方に影響を受け，その人物の働きが当時の人々に影響を与えるなど，相互依存関係の中で人物の働きを理解することが，当時の時代像を正しく理解する上で不可欠であるからである。

従って，「○○さんの行ったことは，当時の農民のどんな願いに影響されたのだろう」等の多面的・多角的な視点から人物の働きを学ぶ視点が求められる。

それ故，特に筆者は（群）とした（詳細は後述)。

目標(3)

目標(3)は以下のように整理できる。

○歴史に見られる⇒国際関係
⇒文化交流　のあらましを
⇓
理解させ
○我が国
と　の⇒歴史や文化が相互に深くかかわっ
○諸外国　ていることを
⇓
考えさせ
他民族の文化，生活などに関心をもたせ
⇓
国際協調の精神を養う
（到達目標）

目標(3)は，歴史上の国際関係や文化交流の概要の理解を通して，我が国と諸外国の歴史や文化の相互関係を考えさせることをねらいとしている。

一国の文化は多くの場合，他国の文化の影響を受けつつ，一方で他国の文化にも影響を与えつつ，時に融合して新しい文化として形成されていくという，文化の歴史形態の様相を理解させようとしている。

前者の例では，飛鳥文化などが好例であり，後者では江戸時代にジャポニズムといわれ西洋に強い影響を与えた浮世絵などが挙げられる。融合の文化では国風文化なども一例であろう。このような見方は

課題学習 ▶ 縄文時代探検！

教科書…P.20～25
配当時数　2

本時のねらい　●縄文時代の人々の暮らしと文化について，現代との関わりのなかでとらえ，考える。

補充資料

縄文時代Q&A

Q1　縄文時代は人類史の中でどう定義できるか？

「日本列島に住む人々が，狩猟・漁労・採集を基盤として定住生活を送った時代」。日本列島に人が住み始めたのは少なくとも約3万5000年以上前。当時は大陸と地続きの「日本半島」と呼べる地形で，人々は歩いて移動してきた。彼らは狩猟・採集を続けながら農耕を始めることなく，定住生活へと移行した。海に囲まれて気候も温和な島国で，食料となる動植物も豊かだったからである。

Q2　縄文時代はいつ始まり，どのくらい続いたか？

今から1万5000年前。青森県大平山元（おおだいらやまもと）1遺跡から発掘された最古の土器が，この年代のものであることがわかった。土器づくりは，非常に手間暇がかかる。それは人々が定住するようになって，初めてできることである。その後，約1万2000年続いた。

Q3　土器がもたらした影響は？

土器は人々の生活に大きな飛躍をもたらした。土器によって食料を煮炊きできるようになった。植物のなかには生のままでは食べられないが，加熱によって消化できるようになるもの，毒性が消えるものがたくさんある。土器を使うことで，人は様々なものが食べられるようになり，食料事情が安定した。縄文時代が長く続いた大きな理由である。

Q4　土器は誰がつくったのか？

土器づくりは基本的に女性の仕事だった。男性が狩りなどでムラの外に出たのに対し，ムラに残った女性が子育てをしながら土器づくりをした。

Q5　なぜ火焔型土器のようなものがつくられたのか？

もともと土器は入れ物で，突起は本来邪魔なもの，今の感覚からいうと大変使い勝手が悪い。それにもかかわらず，なぜ本来の用途から逸脱し，機能的には無駄ともいえる土器がつくられたのか。それこそが，草木はもちろん，石ころにいたるまで，すべてのものに魂があり，人と同格の存在として捉える縄文人の感覚から来ている。土器も同じく，人格を持つ存在である。人は皆，顔形や体型が異なるように，土器にも個性があると縄文人は考えた。その結果，火焔型土器に代表される，すぐれた造形美をもつ土器が仕上げられていった。

Q6　縄文人はどんな住居に住んでいたか？

竪穴式住居が基本。地面を掘り込んで床を整え，柱や梁で家の骨組みをつくり，その上から土や茅葺きの屋根をかぶせて，覆屋風のイエ（家）とした。イエは一家族につき一軒で，縄文人にとっても安らぎの空間だった。

Q7　何を食べていたのか？

クリやクルミ，トチをはじめとするドングリなどの木の実を主食の一部とし，シカ，イノシシなどの獣，海や川で捕れる魚介類など，その地域で採れる多種多様な動植物を食べていた。灰汁（あく）の強い木の実を長時間水にさらしたり，熱処理をして灰汁を抜く方法も確立した。縄文人は自然の変化に同調して，季節ごとに食料を変えていった。つまり「縄文カレンダー」（教科書P.24）があった。春には山野に芽吹く山菜を採り，気温の高い夏は水辺で漁をし，恵みの秋には木の実や鮭を捕る。一部は保存食とし，冬には獣を狩った。ただし縄文人は，シカやイノシシを捕り尽くすことはしなかった。そこには共存のルールがあった。新潟県の青田遺跡などからは大きさが3.7センチほどもある見事なクリが見つかっている。これは縄文人が，大きな実のなる木を選んで，育てていた証だ。ムラの周りは，クリのような木の実のなる木が集まった。（以上Q1.～Q7.，小林達雄「縄文時代の基礎知識Q&A」「縄文人のインテリジェンス」『別冊太陽　縄文の力』212号〔平凡社〕，小林達雄「日本のはじまり」『教育再生』90号〔日本教育再生機構〕より抜粋，一部改）

「持続可能な社会」のモデルとしての縄文

縄文時代のムラの周りには，「ハラ」があった。ハラとは，ムラの周りを取り囲む自然的秩序が保たれている空間のことだ。ムラが人の手が入った場所だとすれば，自然そのものがハラには残っている。人工的空間から，自然の世界に出て行って，必要なものを手に入れてムラに帰ってくる。ハラは，食料庫であり，必要とする道具の資源庫でもあった。

この縄文におけるハラの存在は，世界的にはほとんど見られない。世界の他の地域の定住では，農耕が営まれている周りの自然も，全て征服する対象，つまり敵とみなされる。自然的秩序は否定され，そこはいつか開墾・伐採され，より生産性のある人工的場所，つまり「ノラ」につくりかえられる対象だ。世界史的に，遊動的生活から脱却して，農耕を基盤として定住する時代を新石器時代と呼ぶが，それは人が自然の一部ではなくなり，人工的に自然を支配することができるようになった時代といえる。つまり，ハラの否定である。

一方で，縄文時代は，ムラに定住をしながらも，あくまでハラの自然的秩序を保つ。しかし，ハラの維持はとても困難だ。一定のところに留まり，好き勝手に動物を狩ったり，木の実などを採ったりしていては，いつかは無くなってしまう。また厳しい冬などがめぐってくれば，食料の確保はいやでも難しくなる。そうした状況にもかかわらず，縄文人が1万年もの間，農耕をせずにハラを維持して定住的生活を続けてこられたのはなぜか。それは縄文人が，自然に耳を傾けていたからだ。（小林達雄「日本のはじまり」『教育再生』90号より抜粋，一部改）

縄文人の言語感覚と自然観

縄文人は，大和言葉の原型にあたるコトバを話していた。8世紀に『万葉集』という言葉の芸術が完成するが，そのような高度な言語感覚は，縄文時代から長い年月をかけて培われたものであろう。

日本語は，諸外国語に比べて音節がきわめて少ないコトバである。単語の数も少なくなる。その代りに縄文人は，自然が奏でる音を擬態語や擬声語で表すことで言葉を豊かにしてきた。風はソヨソヨ，川はサラサラ，虫はミンミン，リンリンといった具合だ。縄文人は1万年にわたって自然と対話し，自然を観察する目を磨き，耳をそばだてた。こうして四季折々の変化に敏感に反応する，日本人の自然観の基礎が育まれた。

縄文人のカレンダー――二至二分

縄文人の世界観のなかで重要な要素は，「二至二分」，すなわち夏至・冬至・春分・秋分という一年の節目にあたる日だった。こうした特別の日の太陽の運行から，記念物の方位などが決められている。三内丸山遺跡の掘立柱建物（教科書P.21）の六本柱も注目に値する。3本ずつ並んだ柱の列は，夏至の日の出と冬至の日の入りを指し示している。

縄文人がかくも熱心に太陽の運行に関心を寄せたのは，それが，カレンダー，時計だったからである。

ヒスイは北海道から沖縄まで分布している

縄文人は石を加工して玉類をつくり，身を飾った。そこで目をつけたのが新潟県糸魚川市の姫川上流のヒスイだ。ヒスイは硬度七で，それまでの整形や掘削の方法では歯が立たない。それを特別な技法を駆使して克服した。そしてヒスイ製珠に特別な価値を付加して，北海道から沖縄に至る縄文世界のなかに，象徴的な存在あるいは威信財として組み入れたのである。（「縄文人の言語感覚と自然観」「二至二分」「ヒスイは北海道から沖縄まで分布している」は小林達雄「縄文人のインテリジェンス」『別冊太陽　縄文の力』212号より抜粋，一部改）

定住が老人の活躍と文化の伝承を可能にした

土器の発明によって，彼らの食品リストに，大幅に植物性の食料が加わることになった。これが土器による第一の歴史的意義である。

植物性の食料への依存が増したことで，縄文時代の社会は，さらに重要な変化を迎えることになった。食料事情は安定し，人々は定住的なムラを営むことができるようになったのだ。定住が，縄文社会に多くの利点をもたらしたのである。これが土器によってもたらされた，第二の歴史的意義である。

旧石器時代のように移動の多い生活をしていると，一番困るのが足腰の弱った老人である。老人たちの足では，道なき道を進む移動についてゆくのは難儀なことだ。したがって，アメリカ先住民をはじめとする，さまざまな民族例が示すように，老人が自ら身を退いたり，ときには老人を見捨てざるをえない事態が起こる。また，母親たちもたいへんだ。乳飲み子を抱えて移動しなければならない。こうした問題は，定住により一気呵成に解決される。

男たちが狩りに行っても，老人たちはムラで待っていればよい。ムラにいて子供の面倒を見ていればよい。女たちは籠を下げて植物性食料を存分にとってくることができる。働き盛りの若夫婦なら，思う存分遠くへ出かけて，大量に食料をとってくることが可能になる。短時間で効率を上げることができる。

一方では，老人たちの活躍の場が与えられる。老人たちは，多くの経験を積んでいる。その蓄積した経験を，体系的に子供たちに教える。文化は次々にムラの人たちに蓄積されていく。つまり，老人は文化を蓄積し，子孫に伝えるという新たな役割を果たすようになる。こうして，縄文文化の発展が約束されたのだ。縄文文化が技術的に発展し，輝かしい文化的内容を持つにいたるのは，文化を蓄積し継承していく体制が整ってきたからである。これは土器の発明がもたらした大きな成果といえるだろう。（小林達雄『縄文人の文化力』〔新書館〕より抜粋）

15 武士の登場と院政

教科書…P.70～71
配当時数　1

本時のねらい

- 武士の登場と武士団の形成についてとらえるとともに，地方武士の反乱などを通し，その勢力が拡大したことを理解する。
- 院政のおこりと源氏・平氏の台頭，および平氏による政権樹立の経緯について理解する。

学習の流れ

	学習活動	発問例
導入	▶「武士」のイメージ，「武士」について知っていることを発表する。	●「武士」のイメージは？　また，「武士」に関して，どんなことを知っているか。
展開	▶武士の登場と武士団の形成，さらに，平将門の乱・藤原純友の乱から武士勢力の拡大を理解する。	●牛車に乗っている人の身分は？　また，牛車の周りにいるのは，どんな人たちなのか。
	▶院政のあらましをとらえ，また，保元の乱の結果，武士の力が政治の実権のゆくえを左右するようになったことを理解する。[3]	●院政とはどのようなものか。また，それぞれの院政期の中心となった上皇（法皇）は誰か。
	▶平治の乱の結果，平清盛により初の武家政権が成立したことを理解する。また，平氏の専横に対する不満の高まりが，平氏打倒の動きにつながったことをとらえる。[2][4]	●平治の乱に勝利して初めて武家政権を開いた人物は誰か。また，彼が行った事柄を具体的に挙げてみよう。
まとめ	▶武士の登場から成長，院政期をはさんで平氏政権が成立するまでの流れを確認させる。	●武士はどのようにして登場し，勢力を強めていったのかまとめてみよう。

解答例　武士たちは，国司として地方に下った皇族の子孫である源氏と平氏をかしらとして，地方豪族と結びつきながらまとまっていき，武士団を形づくるようになった。10世紀になると，大規模な武士の反乱が起きるようになり，朝廷はそうした反乱をおさえるために，武士の力にたよらざるをえなくなった。

■最終板書例　本時の要点

〔武士の登場〕（10世紀ころ～）
地方豪族・有力農民の武装化
↓
武士 →武士団の形成
かしら＝棟梁
源氏：東国 ｝を中心に勢力拡大
平氏：西国 ｝
武士の反乱
平将門の乱 ｝朝廷の命を受け，
藤原純友の乱 ｝武士が鎮圧→武士勢力が強まる
〔院政のおこり〕（11世紀末～）
後三条天皇即位→藤原氏の衰え
白河上皇　院政開始
保元の乱（1156）
（勝）後白河天皇方←→崇徳上皇方（負）
↓
武士の力，政治の実権を左右
〔平氏の繁栄〕
平治の乱（1159）
（勝）平清盛方←→源義朝方（負）
↓
政治の実権握る＝平氏政権
・太政大臣…武士として初
・日宋貿易…大輪田泊（現神戸港）整備
・安徳天皇の外戚
・平氏一族…高位高官に昇る
※「平氏にあらずんば人にあらず」
↑
平氏への不平・不満高まる

学習資料

1【図版】貴族や武官を従える白河上皇

ねらい…武士が，朝廷や貴族に仕えるなどして，しだいに中央政界に進出していったことを理解させる。

解説…朝廷や貴族たちは武士を侍として奉仕させる，都の市中警護や貴族の身辺警護などに当たらせるようになった。このような状況が生じたのは，白河上皇が北面の武士として源平などの武士を登用したことが契機の一つとなっている。

2【図版】平治の乱

ねらい…平治の乱は，藤原信頼と源義朝が藤原通憲（信西）打倒を目的に引き起こし，結果的に，源義朝と平清盛が，それぞれ一門を率いて衝突した争乱であったこと，これに勝利を収めた清盛が，平氏の全盛期を築き，武家として初の政権を成立させる直接的な契機となったことを理解させる。

解説…平治の乱の帰趨を決定付けたのは平清盛の動向だった。天皇や上皇を清盛方に奪われた信頼・義朝方は，天皇・院を守るという大義名分を失って逆賊とされ，これが敗北の一要因になったのである。

義朝軍が三条殿を急襲した際の惨状を，平家物語は，「散々に射ければ，火を逃るる者は矢を逃れず，矢を逃るる者は火を逃れず，矢をまぬがれんとする者は井にこそ多く入りけれ，下は水に溺れ，中は人に押され，上は猛火燃えかかりければ，命の助かるべき事を得ず」と記している。

3【図版】天皇の系図と院政の時期

ねらい…院政の時期は前期院政期と後期院政期とに分けられ，さらに，それぞれ白河院期・鳥羽院期と後白河院期・後鳥羽院期の４期にわたって展開されたことをとらえさせる。

留意点…院政の成立とその展開についてはそのあらましを説明するにとどめ，平氏が院と結んで勢力の伸長を図った点については，簡潔にふれる。

4【図版】平清盛像

ねらい…清盛の身体的特徴をとらえさせ，清盛が実在した人物であることを具体的にとらえさせる。

解説…平氏政権は，摂関家に著しく類似しており，武士でありながら貴族的な性格が強かったことを指摘し，源頼朝が開いた本格的な武家政権につながる過渡的な政権であったことを補足する。

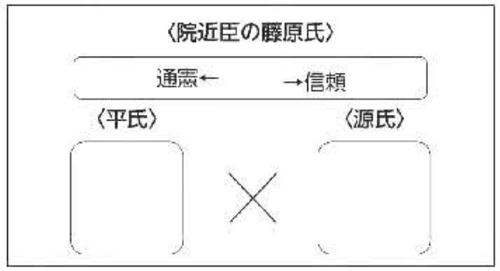
清盛の出生に関しては，白河院御落胤説を紹介することで，清盛に対する関心を高めさせたい。

5【図版】源氏と平氏の系図

ねらい…源氏・平氏ともに天皇の子孫であることに気付かせる。それが武士団の棟梁に推戴されるに当たって有利に働いたことをとらえさせる。

補充資料

平治の乱関係図



厳島神社

伊都岐島神社とも記され，日本三景の一つ「安芸の宮島」と称される厳島に鎮座。安芸国一宮。祭神は市杵島姫命ら宗像三女神。社殿は推古天皇のときの創建と伝わる。

1146（久安２）年，平清盛が安芸守になって以来平氏と強く結び付き，平氏一門の尊崇を集めた。清盛は，1160（永暦１）年に初めて参詣を果たし，以後，文献に記されただけでも10回参拝している。

現在の建物は1241（仁治２）年の造営で，1571（元亀２）年，毛利元就が大修理を行ったと伝わる。社殿は，満潮時には床下まで水に没するという特異な神社建築として知られている。現在世界遺産に登録され，日本を代表する文化遺産の一つとなっている。

日宋貿易

12世紀後半に至るまでの日宋貿易の担い手はもっぱら宋商人であったが，平清盛が政権を握ると対外貿易を積極的に推奨する政策をとったため，日本人で宋へ渡航する者が出てきた。

清盛は大輪田泊（現神戸港）の修築，音戸ノ瀬戸の開削などによって大船の瀬戸内海航行の便宜を図った。

清盛は日宋交流を積極的に促進し，その開明的な方針は鎌倉幕府にも受け継がれ宋に渡航して貿易を営む日本人が飛躍的に増えた。

日本からは銅や硫黄などの鉱物，木材，日本刀などの工芸品が輸出され，宋からは宋銭・陶磁器・絹織物・書籍・文具・香料・薬品・美術品などが輸入された。

大量に輸入された宋銭は，貨幣経済の進展に寄与し，また，宋の新しい文化・技術・思想なども伝えられ，日本の社会・経済・文化に大きな影響を与えた。

主な参考文献：『日本史辞典』（創元社），『岩波講座日本歴史 第４巻』（岩波書店），『世界大百科事典 第３，17巻』（平凡社），『原色日本の美術 第16巻』（小学館），『詳説日本史（改訂版）』（山川出版社）

近代②の世界へようこそ！「大衆の時代」のようすを見てみよう

教科書 P.205～209
配当時間　2

本章のねらいとポイント　学習を深めよう～「大衆の時代」のようすを見てみよう

■人口の移動について

大戦景気によって，総人口増加は1915（大正4）年の約1万7000から1919（大正8）年には約3万に増えた。特に都市部人口は3.4倍となり，工業従事者100人以上の企業が占める割合は，1914（大正3）年の16%から1921（大正10）年には35%になった。このため農村から都会に出るのは従来のような家計を補助する女工ではなく，家計の責任者たる成年男子が主となった。こうして東京や大阪を中心とするサラリーマンやインテリといった層が形成されていった。本文では東京の人口増加が紹介されているが，大阪でも33万（178%），横浜は19万（157%）いずれも，398万→920万）というたいへんな増加ぶりを示している。

これに対し，農村，漁村，山村などのインフラ整備も急ピッチで進んだが，人口増加には追いつかず，ラッシュ時の混雑は都会の名物となるほどだった。住宅事情も深刻であり，多くの人々は貧しからのトロか，乱雑に建てられた小さな家に同居をあって暮らすしかなかった。1923（大正12）年の関東大震災が未曾有の被害となった一因にこういう点にもあった。

▶Q❶

中央左には都市部の女性，農夫，軍人，タクシーの運転手，また自転車に乗って珍しい見本を行った商家の主人夫婦も見受けられる。右は女工人とおもわれる家族，セーラー服の水兵，ランドセルをかけ大人を追う学生の姿も描かれている。

▶Q❷

中には和服も見受けられるが，洋装の人がずっと多くなっていることがわかる。男性はすべて帽子をかぶっており，女性も和服姿は例外である。ブロックコートのようなしゃれたものや学生服のように伝統的なものも目立つ。東京駅というにぎやかな場所であるせいか，よそいきの服を着た人々が多い。当時「とんび」とよばれた長いマント様のコートを着用している男性も見受けられる。

▶Q❸

関東には多くの自動車が描かれている。明治末期から自動車の実用化に拍車がかかり，第一次世界大戦時の好景気にも支えられ国産車も登場することとなった。しかし，旧時代の馬車や人力車も同じ道路を走っていたため事故も多く，1917（大正6）年の自動車台数は1300台にもかかわらず，被害者は3700人にものぼっている。このため翌年には初の道路行政の基本となる道路法が公布されている。なお，1924（大正13）年からは都会にタクシーが走るようになり，「円タク」の料金であったことから「円タク」とよばれた。

関東方面にはオートバイが見つかる。しだいに増加する自動車に対するための対策を取るべく1916（大正5），警視庁が白バイの前身である「赤バイ」6台をスタートさせた。同年夏に都内にサイドカー付きのオートバイを郵便輸送に導入している。自転車がなくなると地方にも愛好者が増加し，大正末期になると1万台を超えるようになった。ツーリングもさかんになり，各地にグループが結成され，レースなども行われるようになった。また自転車も増加の一途をたどり，大正のはじめには約42万台を数え，都会の新聞や工場では配達や連絡に欠くべからざる役割を果たしていた。

上空には飛行機および飛行船が見える。飛行船は明治末期から開発が進み，大正の飛行船全盛期に入り2年に国産に成功，東京―大阪間の定期運行を行っている。主に軍事用に想定されていたため，国産の主体は陸海軍であった。航空機もその利用性が第一次世界大戦で示されたため，まず陸軍が注目し，国内の自動車メーカーや内燃機関メーカーに機体やエンジンの生産を依頼するようになった。大正末期には6社ほどの航空メーカーが登場し，軍との関係を強めていった。

▶Q❹

有名な浮絵家・歌川豊春作品の模倣によるものであり，1908（明治41）年に着工，6年半の年月をかけ1914（大正3）年に完成した。煉瓦レンガ造りの3階建てであり，大阪市役所に当たり「東京駅は黄金色の太陽のようだ」とあいさつした。その開業以来，東京駅は皇居と向かい合っており，「天皇の駅」として位置付けられていた。その意味もあり，駅の出入口は皇居側の丸の内のみであり，八重洲に続く八重洲方面には一つもなかった。

▶Q❺

関東大震災では木造で密集した市街地が大きな被害を受けたため，不燃の鉄筋コンクリート住宅が求められた。一方として都市のサラリーマンを対象として造られており，電気・都市ガス・水道・水洗便所など近代的設備を誇った。

部屋は畳の和室であり，ちゃぶだい本棚がある。本棚には文学全集や百科事典のような厚い装丁の本が見られる。また，女性は和服の上にかっぽう着を着用し，手にはティーカップをもっている。ちゃぶだいの上には電気スタンドが置かれている。

■こんなものも大正時代

●ラジオ

日本のラジオ放送の開始は1925（大正14）年3月。東京芝浦の東京放送局放送所から第一声が流れた。当時の受信契約数はわずか3500。一日の放送時間は3時間で，受信料は1円であった。電波にわずか220Wの出力だったため，東京市内でないと聞きとれなかったが，7月に放送局は愛宕山の新しい局舎に移り，出力も1kWを誇りになった。大震災の後であったため，人々にとって信頼できる情報を瞬時に届けるラジオ放送は貴重であった。

●雑誌

大正時代は自由な雰囲気を反映して，雑誌文化が花開いた。「中央公論」をオピニオン・リーダーとして「太陽」を「改造」といった総合雑誌が世論形成に影響を与え，文芸雑誌として1923（大正12）年にスタートした「文藝春秋」も総合雑誌として領域を伸ばしていった。子供向けの「赤い鳥」「少年倶楽部」「少女倶楽部」，女性向けの「主婦之友」「婦人公論」，これもこの時代の代表である。

●高校野球

1915（大正4）年8月に，大阪府豊中運動場で第1回全国中等学校野球大会が開催。1924（大正13）年の第10回大会に合わせて完成したのが甲子園球場であった。

●洋食

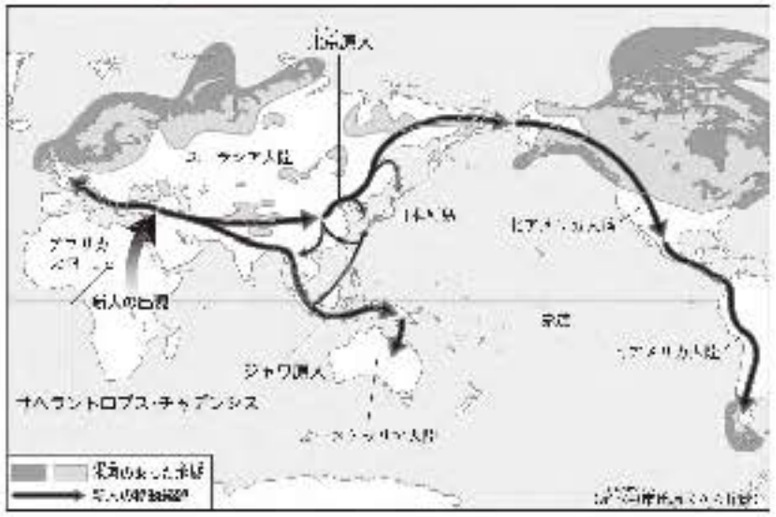
「コロッケ」「ライスカレー」「トンカツ」は大正の三大洋食とよばれた。「カツ丼」は1921（大正10）年，早稲田の学食で流行したのが始まりとされた。カレー粉の発売が始まったのも1923（大正12）年からである。

主な参考文献：『日本の歴史　第27巻』（小学館），田中喜久『大正時代をめくってみた』（産経新聞社）

歴史的分野　年間指導計画・観点別評価規準表

章	学習内容	配当授業時数	学習のねらい	評価規準 社会的事象への関心・意欲・態度	評価規準 社会的な思考・判断・表現	評価規準 資料活用の技能	評価規準 社会的事象についての知識・理解
序章							
序章	年代や時代区分の表し方 【課題学習】歴史人物Q&Aカードをつくろう 地域調査に出かけてみよう！	6	○歴史を学ぶ意欲を高め，その意義について考える。 ○年代の表し方や時代区分についての基本的な考え方を理解する。 ○小学校で学習した人物について調べる活動を通して，時代の区分やその移り変わりに気付く。 ○身近な地域の歴史を調べる活動を通して，地域への関心を高め，地域の具体的な事例との関わりのなかでわが国の歩みを理解する。	○歴史の学び方について関心をもち，意欽的に調べようとしている。	○歴史には様々な時代区分の仕方があることについて考察し，適切に表現している。	○様々な資料を収集し，適切な情報を選択して，図表なども用いてまとめている。	○小学校で学習してきた歴史上の人物の活躍した時代とその下剋について理解している。
第1章　原始と古代の日本							
1 日本の国のあけぼの	海洋国家・日本の歩み ①縄文時代の人々の暮らしと社会 ②弥生時代へ…農耕・古代へ… 原始・古代の世界へようこそ！	2	○縄文時代の人々が果たした役割について考察する。 ○原始・古代における日本の歩みの大きな流れを大観する。 ○原始・古代の特色について，関心・意欲をもって学習し，とらえる。	○平安時代の貴族について関心をもち，貴族の生活や文化を意欲的に調べようとしている。	○「源氏物語絵巻」から，平安時代の貴族の暮らしがどのようなものだったのか，多面的・多角的に考察し，その内容を適切に表現している。	○「源氏物語絵巻」から，平安時代の貴族の様子の特徴について，読み取ったりまとめたりしている。	○原始・古代という時代の大きな流れを，その特色とともにとらえ，概要を理解している。
	第1節 日本のあけぼのと世界の文明		○人類の出現，文明のおこりから各地に国家が生まれていったようすを理解する。 ○わが国の成り立ちとその発展を東アジア諸国との関連からとらえ，当時の人々の考え方に気付く。	○古代の文明やわが国の成立について関心をもち，意欲的に調べるとともに，「倭人の自然観や宗教観がどのように受け継がれているか」について考察する。	○わが国の形成と発展に大陸の文化が果たした役割について，多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している。	○古代のわが国のようすについて，様々な資料から調べ，政治・社会・文化などに分けてその特色をまとめている。	○世界各地で文明や国家がおこったようすを理解するとともに，わが国の文化に大陸文化が加わり，しだいに国の形が整っていった経過を理解している。
	1 日本列島ができたころの人々	1	○人類が出現し，狩猟・採集の生活をしながら世界に広がっていったようすについて理解する。 ○日本列島ができた経緯や人々の暮らしのようすについて理解する。	○人類や「倭人」の起源に対する関心をもち，進んで追究を通して，意欲的にまとめようとしている。	○人類の発生とその世界への広がりについて，様々な資料を収集し，適切に活用してその過程や結果をまとめている。	○人類の発生とその世界への広がりについて，様々な資料を収集し，適切に活用してその過程や結果をまとめている。	○旧石器時代の特色について，当時の遺跡などとともに理解している。
	2 豊かな自然と縄文文化	2	○縄文時代の特色を一時期や年間，貝塚などの遺跡をもとに理解する。 ○豊かな自然に育まれた豊かな生活が，現代日本人の文化や習俗にもつながっていることに気付く。	○縄文時代の人々の暮らしと文化に関心をもち，進んで追究を通して，意欲的に調べようとしている。	○縄文時代の人々の生活・住居について，多面的・多角的に考察し，その内容を適切に表現している。	○縄文土器や土偶の特徴などを様々な資料から読み取っている。	○縄文時代の人々が，豊かな自然と共存して暮らしていたこと，およびその文化が日本文化の基礎をつくったことを理解している。
	3 文明のおこりと中国の古代文明	1	○古代文明が大河のほとりでおこったことについて考える。 ○古代文明の特色を，文字や遺跡物を用いて理解する。	○世界の古代文明に関わる建築や文字などに関心をもち，意欲的に調べようとしている。	○文明発生の要因を，農業・牧畜の発達，国家の成立と関連付けて考察し，適切に表現している。	○古代文明の特色やその共通点について，様々な資料から読み取ったりまとめたりしている。	○世界の古代文明が，農耕・牧畜の発達を基盤として成立したことを理解している。
	4 稲作・弥生文化と邪馬台国	1	○弥生時代に本格化した米づくりが人々の定住・集団化を促し，ムラがつくられ，やがてクニへと発展していったことに気付く。 ○弥生文化の特色を遺跡や土器などの資料から考えさせる。	○弥生時代の人々の暮らしと文化に関心をもち，進んで追究を通して，意欲的に調べようとしている。 ○邪馬台国について関心をもち，中国の書物の記述などをもとに，意欲的に調べようとしている。	○弥生時代の人々の生活のようすについて，様々な資料を活用して調べ，縄文時代と対比しながらまとめている。 ○遺跡や遺物を手がかりに，考古学の学説を活用して，当時の人々の暮らしのようすを読み取ったりまとめたりしている。	○稲作の広がりによって，人口が増え，多くのムラがつくられ，クニが形成されるようになった過程を理解している。 ○中国の書物に記された弥生時代の邪馬台国のようすについて理解している。

第1章 原始と古代の日本



1

(1)	アフリカ（大陸）
(2)	新人
(3)	ア，ウ，エ
(4)	ウ

1 上の地図は，人類の出現と新人の広がりを示したものである。次の問いに答えなさい。［知識・理解］

(1) 人類の祖先はどこで出現したと考えられるか。大陸名を書きなさい。

(2) (1)で出現した人類を何というか，漢字2字で書きなさい。

(3) 新人は日本にどのような方向からやってきたと考えられるか。正しいものをア～オからすべて選びなさい。

ア フィリピン　イ カムチャッカ半島　ウ 樺太（サハリン）

エ 朝鮮半島　オ オーストラリア

(4) 新人が日本にやってきたころに関して述べた文として正しいものを，ア～エから一つ選びなさい。

ア 当時，地球は氷河時代のなかで，日本列島は大陸と地続きであったが，きびしい寒さのため，大陸からヒトへの移動は不可能であった。

イ 当時，地球は温暖化していたが，海面は現在よりも上昇していて，日本列島は大陸からもりはなされていたので，日本への移動は困難であった。

ウ 当時，地球は氷河時代の氷期で，人類は寒くてきたりトナカイやマンモスなどを追って，新人も日本列島にやってきたと考えられる。

エ 日本列島にやってきた新人は，いさな集落をつくり，磨製石器を使い，農耕を始めた。

2 下は二種類の土器の写真である。次の問いに答えなさい。

(1) 次ページの文で，Aの写真と関係の深いものにA，Bの写真と関係の深いものにBを記しなさい。［思考・判断・表現］

ア 表面に縄目の模様（文様）がつけられることが多かったため，縄文土器とよばれ，土器作りの一つとされる。

イ 青森県の三内丸山遺跡からは，大型の竪穴住居跡や掘立柱建物跡のほか，遠くの地域との交易で入手したと考えられるものもみつかった。

A

B

ウ 稲作で十分な収穫が見込まれるため，人口が急増したため，縄文土器とくらべて薄手でかたい土器がつくられるようになった。

エ 豊作のいのりや子孫繁栄などの願いのためにつくられたと考えられる，土偶とよばれる人形（ひとがた）が発見されている。

オ 貝塚の中から竪穴住居跡からは，人骨，内臓，それらに埋まった生活跡が発見された。

カ 青銅器や鉄器などが大陸から伝わり，銅剣・銅鏡・銅矛・銅鐸などがつくられた。

(2) 写真Bの時代の3世紀ごろ，中国の書物によれば，日本には，中国に使者を送る国が30ほどあったが，その中で女王が呪術などによって治めていた国を何というか，また，その女王とはだれか。［知識・理解］

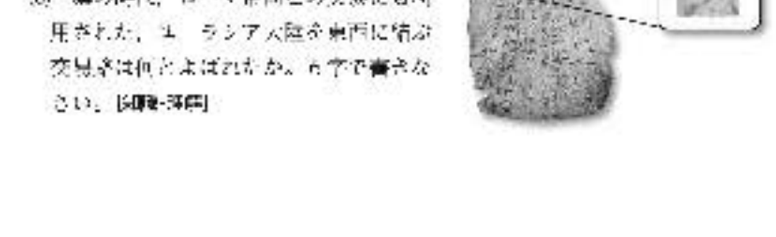
(3) (2)の国の所在地については，おもに二つの説が唱えられている。その二つの説を「～説」という形で書きなさい。［知識・理解］

(4) (2)の国が使者を送った中国の王朝として正しいものを，ア～エから一つ選びなさい。［知識・理解］

ア 殷　イ 周　ウ 秦　エ 漢

2

(1)	ア	A
	イ	A
	ウ	B
	エ	A
	オ	B
	カ	B
(2)	国名	邪馬台国
	女王名	卑弥呼
(3)		近畿説
		九州説
(4)		ウ



3 上の地図は世界の古代文明についてしるしたものである。次の問いに答えなさい。

(1) 地図中のア～エにあてはまる文明の名称を書きなさい。［知識・理解］

(2) ア～エの文明が発達した地域には，どのような地理的な共通点があるか，地図から読み取れることを書きなさい。［思考・判断・表現］

(3) 下のa～cの写真は，地図中のア～エまでのいずれかの文明の文字である。a～cの文字に対応する文明を，ア～エの記号で答えなさい。

［思考・判断・表現］［技能］

a

b

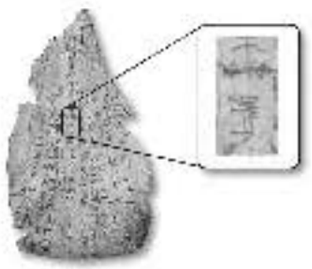
c

(4) 右下の写真は，漢字のもとになったといわれるものである。この文字の名称を書きなさい。［知識・理解］

(5) 中国で文字や貨幣を統一し，万里の長城を築いた秦の初代皇帝を何というか。

［知識・理解］

(6) 漢の時代，ローマ帝国との交易にも利用された，ユーラシア大陸を東西に結ぶ交易路は何とよばれたか。カタカナで書きなさい。［知識・理解］



3

(1)	ア	中国
	イ	インダス
	ウ	メソポタミア
	エ	エジプト
(2)		大きな川の流域にあった。
(3)	a	ウ
	b	イ
	c	エ
(4)		甲骨文字
(5)		始皇帝
(6)		シルクロード